対象作品／ダニエル・キイス著『アルジャーノンに花束を』早川書房

失うこと

弘前大学教育学部附属中学校　佐藤　聡一郎

この作品は、主人公チャーリーの日々が日記風に綴られている。一人称視点で進むこの日記は、チャーリーの成長と苦悩が非常に伝わりやすい構成となっている。特に印象的なのが、チャーリーが書く文字と言葉遣いだ。

手術前の文章は、三十二歳の大人の男性が書いたとは思えないような、子供っぽく、拙い文章だったのに対し、手術後の文章は、日々努力を重ね、メキメキと知能をつけるチャーリーの努力がよく表れている知的なものだった。

ただ、「知る」ことが、必ずしもプラスの結果に自分を導いてくれるわけではなかった。

知能を獲得し、天才となったチャーリーは、自分が親に疎まれていたこと、仲が良いと思っていた仕事仲間に馬鹿にされ、いじめられていたことを理解してしまった。一概に言えるものではないが、もしも自分に起きたことだとしたら、その悲しみは計り知れない。

世の中には、「知らぬが仏」という言葉があるが、この言葉はまさにチャーリーの人生を表しているように思う。特に「仲良くなりたい」と努力を惜しまなかったチャーリーがこのような仕打ちを受けるのだから、本当に皮肉なものだ。これほどまでではないが、私も似たような経験をしたことがある。

小学生の頃、独りだった私にとても優しく声をかけてくれた女の子がいた。彼女は誰にでも優しく、男女問わず人気があった。頭脳明晰、品行方正、まさに非の打ちどころのない人だった。少なくとも当時の私は、わずかながら彼女に好意を抱いていた。そんな日々も、長くは続かなかった。「あのぼっち、私が話してやってるからって調子に乗って、本当に気持ち悪い。」忘れもしないあの交差点。それは明らかに彼女から発せられたもので、崩れ落ちることも、頬に雫を落とすこともなく、立ち尽くしていたのを覚えている。

自分の存在する意味も、彼女への気持ちも、なにもかも崩れて、自暴自棄になった。こんなことなら、始めから知らな

ければよかったと、私を騙(だま)していた彼女を、それに気づけなかった自分を呪った。
チャーリーに至ってはこれが家族にも及ぶのだから、本当に辛かっただろうなと思う。この作品で、チャーリーは知能を得る代償に、本来知らなかったことを知ってしまった。
孤独を満たすものを得た私もまた、それを打ち消すほどの非情な現実を知った。
これらのことから、人は生きる限り死ぬまで失い続けるのだと、私は思った。
こうやって筆を走らせている今も、刻一刻と時間は失われていく。シャーペンの芯だって、消しゴムだって、摩耗の末に失われる。人は死ぬ。地球だっていつかは消える。
これは紛れもない事実である。だからこそ、失うことを恐れてはいけないのだ。
全ての行動にはリスクが伴う。その度リスクを恐れていては、現状を打破することも、維持することすらできない。大切なのは、失う前に何をするかだ。

私たちはいずれ皆死んでいくのだから、生きているうちはせめて楽しもう。こうやって考えれば、上手くいかなかったとしても自暴自棄になることはなくなる。
それでも解決できず、自暴自棄になって絶望に打ちひしがれたとしても、悲しみすらいつかは摩耗するのだ。初めはとげとげしくても、それは削れて丸くなる。形は残るが、そこに痛みは伴わない。それはいずれ塵(ちり)となり、山となる。悲しみの分、人はより大きい山を自分のなかに形作っていく。
人は生まれながらにして可能性という重荷を背負っている。生きる上で人は悲しみ、苦悩し、失う。そうして削られた可能性は踏み台となって、困難な試練を乗り越えるための道具となりうる。
こうして人は生きていく。人は花びらのように繊細で、蕾(つぼみ)から咲いたと思えばすぐに散る。ただ、無数の花びらが織りなす景色は、いびつながらも儚(はかな)げで、美しい。その一部分にでもなれたら、それはきっと幸せだろう。